



## 長澤 均

Hitoshi Nagasawa

グラフィック・デザイナー  
著述家

http://www.bekkoame.ne.jp/  
~pckg

高貴なものから胡散臭いものまで  
社会生活のあらゆる「上・下」を  
できるだけ並列「モンドなもの」を  
して捉える

1956年生まれ。武蔵野美術大学卒業。デザイン事務所パビエ・コレ主宰。20代で1982年インディーズ・マガジン『パビエ・コレ』を創刊。執筆、編集、デザインの全てをこなし、以降『スタジオボイス』などの若者雑誌への執筆を皮切りに、『PUMP』『エレキング』などの音楽雑誌のアートディレクションを担当。舞台美術、立体ディスプレイ制作から川崎市市民ミュージアムでの展示会の図録・ポスター、カシオのデータバンク等の商品企画、WEBデザインまで手がける。2000年、20世紀のデザインと消費とリア化のシステムを探った評論集『パスト・フューチャラマ』を刊行。

### 相反する両極に惹かれて

デザインのことを語るうえで、僕にとって少年期がすごい重要なんです。埼玉のジョンソン基地（現・人間基地）に父が勤めてたんで、家の造りはほとんど米軍ハウスと同じ。家にあるものすべてが、ジャンパーからゴムボートまで米軍のもの。父がCX（基地内の売店）で買ってくるキャンディやゼリーも缶のパッケージに入ったカラフルなアメリカのもの、つまりアルファベットのタイポグラフィの世界だったんですよ。そんなタイポやパッケージやカラフルさのなかで育ったんで、日本的なものが嫌いだったわけじゃないけれど、自然に西洋的なデザイン感覚が身体に染み込んでしまった。

でもアメリカが好きだったかということ、そうでもなくて、小学1年のときに『怪盗ルパン』を読んで、テイル・コートにマントとステッキとか、ヨーロッパのスタイリッシュな感じがすごい好きになった。で、中学2年で兄が通ってた武蔵美の芸術祭に行くと、ヒッピーまっ盛りの頃だったからサイケデリックにハマって。で、高校2年のときにドイツ出身のマレーネ・ディートリッヒ主演の「モロッコ」って1930年の映画を観て、今度はレトロにハマっちゃたんですよ。で、「30年代スタイルで行こう！」とナチ前夜のベルリン関係の本もすごく読んだし、音楽もジャンゴ・ラインハルトという30~40年代のジブシー系のジャズ・ギタリストにハマって自分でそういう曲を作り始めた。バンドもそれまでプログレヤってたのをメンバーに「ジャンゴを聴け」って。髪も短髪に切らせて服装までみんなに30年代風を強制しましたね（笑）。のちに『倒錯の都市ベルリン』（絶版）というワイマール期からナチ時代までのベルリン文化史を書いたけれど、それもこの頃の関心と蓄積がもとになったものです。

僕は所沢高校という昨今話題のすごく自由な高校に行って、僕たちの時代に制服もなくしたんです。で、私服なんです僕は西武新宿線に乗って、学校行かないでそのまま新宿行ってましたね。当時蠟座 っていう客席80ぐらいのアンダーグラウンドな映画館があって、そこでオットー・ミュールやケネス・アンガーなんかのアンダーグラウンド・シネマを観て、その帰りに ビザール ってジャズ喫茶に行って……。僕、中学のときか

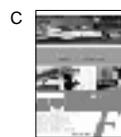
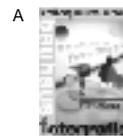
ら左翼活動をしていて、高校のときにすでにトロツキー選集を全巻読んでしまった。でも貴族趣味もすごく好きだった。だからアンダーグラウンドと優雅でゴージャスなレトロ様式、極左と極右が自分のなかで一緒だった。あらゆる両極を自分のなかで詰め込んでいたんです。

服装とかも70年代当時の流行がすごくダサく思えて、18歳頃から着たい服が売ってないから自分でミシンで縫って作ってた。30年代のイギリスのカントリー・ルックに憧れてましたね。ヘリンボーン・ツイードのノーフォークジャケットにニッカポッカ、シェットランドのベスト、ハンチング、アーガイルのソックスっていうスタイル。完全にレトロなカッコしてた。当時の流行から見ると全然わけわかんない「変なカッコしてるヤツだな」と思われてましたよ、きっと。まだみんな長髪で、ベルボトムとか穿いている時期でしたからね。電車乗るとさすがに人の目がすごくて気になりましたけど。「こっちのほうがカッコいいんだ」って自分に言い聞かせてましたね。でも、80年代になったら、ニューウェイヴと古着ブームとともにそんなレトロ・ファッションの時代がやってきた。20代の頃はステッキを持って歩いてたしね。

武蔵美時代、デザインをやりたいなんて一度も思ったことなく、本当は映画監督か詩人になりたかった。で、結局CF制作会社に就職したけれど、自分で雑誌を作りたいと思いたして、でも内容は硬くてもデザインは格好良くないと売れないと思って、それである有名なデザイナーのところに弟子入りしたんです。半年ですけど。そして82年に雑誌『パビエ・コレ』を発行して、同時にデザインの仕事も始めた。インディーズ・マガジンのハシリでしたね。

僕は、デザインをリズムで作ってるんですよ。全部音楽からきてるんです。だから好きな音楽をかけていることがすごく重要。イヤな音楽やリズムを聴くと、そこで僕にとっては創造が途切れるんですよ。あ、「ああ、もう不快不快不快……」って感じて。自分のデザインのリズムがイヤな方向に行くんです。評論書くときも文体とスピード感を大切にしている。

僕にとって、音楽と映画と美術と文学がすべてです。文学といっても物語じゃなくて詩。詩もリズムじゃないですか。あと陰影、光と影。で、映画もそうなんです。僕は映画を物語で見ない。編集とかカットやカメラの位置、ライティング、



(A)「バウハウスの写真」展 図録（川崎市市民ミュージアム）1997年  
(B)「カシオ データバンク・モンドスタール」1997年  
(C)評論集『パスト・フューチャラマ』（フィルムアート社）2000年

ジャンゴ・ラインハルト 1910年ベルギーでジブシーの子として生まれた。13歳の頃からプロとして活動していたが、火事でやけどを負い、以降、3本の指でインプロビゼーションするという天才的な技巧を身につけた。ヴァイオリニストのステファン・グラッペリと組んだ5人編成のバンド オット・クリューブ・ド・フランス は、アメリカのジャズとは、まったく別なジャズを創出した。

ヴィリエ・ド・リラダン 伯爵 1838年、ブルゴーニュの大貴族の家系に生を享ける。祖父の「宝探し」という浪費により、全財産を失うが、赤貧のなか、生涯、高貴きわまりない小説、詩を書き続けた。東京創元社より全集が刊行されている。

ジョージ・ブライアン・ランメル のちにボー（洒落者）・ランメルと呼ばれたこの洒落者は1778年にロンドンに生を享けた。その服装術と洗練された立居振舞いによってロンドンの社交界のみならず、ときの皇太子ウエールズ公まで魅了した。ネック・クロスを完璧に結ぶのに2時間かけ、手袋の各指を別の仕立屋に作らせた話は伝説となっている。彼によって1810年代に「ダンディ」なる言葉が一般化された。

クレーンワーク、そういうところばかり見てるんですね。映像のリズム。物語って関心ないんですね。所詮、他人の人生じゃん、みたいな。僕にとって映画ってのは、ここでこの角度で撮って、ここが何秒流れてカットして、そこをつないで、ここに光がこう流れてとかそういう風なことばかり。そこで考えちゃうから映画観て、話わかんなくなっちゃうんですよ。だからいい映画って大体4、5回観てやっと話わかるんですよ。

映画はデザインも美術も文学も含めた総合芸術じゃないですか。僕はジャン・リュック・ゴダールが一番、得してる気がする。ゴダールは文学ガングンに引用するんですよ。で、映像も編集のリズムも色彩感覚もメチャクチャいい。もう僕が生きてて本当はやりたいと思ってることを全部あの人がやっていますね。

### 「軽さ」と精神性のダンディズム

僕はもともと「クラフトワーク」以降のいわゆるテクノ文化、テクノロジー的なデザインとか好きで、もう一方でパンク的でノイジーなものも好きなんです。アートの影響も強い。大学の頃はデザインなんてばかにして、ファインアートにしか興味がなかった。そのあとでバウハウスのモダニズムも再評価し始めた。そうしたもろもろのなかから自分のスタイル、つまりデザインの 文法を見つけた。だから60は大好きだけれど、そのまま引用したりはしたくない。そういうのがうまいデザイナーもいるけれど、僕は失敗あつてのクリエイティブだと思ってるから。新しいものや未来が好きってわけじゃないけれど過去の引用だけじゃ新しいものは出てこないわけだしね。レトロなもの好きだけど100%引用はしない。必ずどこかに現代性を、斬新さを入れ込む。そこで多少の失敗があってもそれはしょうがないと思ってる。

僕、基本的に世の中においてそれほどデザインが重要だとは思ってないんですよ。大御所になって「権威」を持ったりしたくない。ただ見たことのないものを見たいし……、自分の中で勝手にイメージが湧き出てくる。ちょっと音楽聴いたときに浮かんできたりする。それに近づけるようにものを作るのが楽しかったりするんですよ。だからなにかを「創る」という行為は絶対にやめられない。

僕に大きな影響を与えたものはいくつかあって、ひとつはジャン・コクトオの

文学なんです。17歳のときから熱中し始めて、そこから僕は「軽さ」を覚えた。澁澤龍彦訳、堀内誠一装丁の『大股びらき』を毎晩、枕元において寝ていた。一方で19世紀の作家ヴィリエ・ド・リラダンにも夢中になった。彼が残した文学ってものすごい高踏的なんですよ。もうこんなに素晴らしいものはない。僕、一生でリラダン以上のものはないと思って。地球の全文化が消失してもリラダン作品が残ればいいと思ってます。コクトオが軽さの美だとすると、リラダンは「高貴なる精神」の美ですね。で、しかも大貴族の家系だったのに赤貧流うがごとき生活をしてたんです。そこに精神性が入ってくるわけですよ。要するにお金あるかどうかじゃないってこと、僕が、のちにバンクに走ることに一致するんですね。レトロでダンディズムとかが好きで、でもパンクも好きっていうのはそのへんの文学が持ってた精神性が僕に与えたものですよ。

僕はひとつのことに秀でることが、スマートなこととは思っていない。ずっと憧れていたのはボリス・ヴィアンで、彼は詩や小説を書いて、シャンソンを作詞して、楽器もやって、絵も描いてる。僕もデザインを仕事として、デザイン史・文化史的な評論集『パスト・フューチャラマ』を書いて、家では深夜、誰に見せるでもない詩を書き続け、誰に聴かせるでもないボサノヴァの曲を作り続けている。「創造する」という点ですべてが同次元で、すべてが快樂。19世紀初頭に「ダンディズム」という概念を生んだ世紀の洒落者ジョージ・ブライアン・ランメルが言った言葉に「自己創造、それが私の人生の道楽だ」というのがあられるけれど、僕にとってまさにこれは最高の命題ですね。

僕は、創造するか破壊するかっていうよりも要するにいろいろなことをミックスして全部を並列に考える。だからそれほど「創造」を意識したことはないし、破壊も意識してはいないです。どっちかっていうと モンド っていう言葉を意識してますね。人間の社会生活は常に上下あるじゃないですか。あらゆる領域で上下ってのあると思うけれど、それをなるべく並列＝モンドに捉える。エロなものも高貴なものも、高級なものも胡散臭いものも。そういう観点からなんかを棄てて、なんかを拾ってきてなんかを創って、またそれを破壊してっていうことなんじゃないかな。

